様式Ｃ－１９

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月１１日現在

機関番号：１７１０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2010～2011
課題番号：２２８２００４４
研究課題名（和文）日本語の文終止体系における連体形述語文の位置づけに関する歴史的研究

研究課題名（英文）Historical study on positioning of adnominal form predicate sentences in sentence end system of Japanese

研究代表者
勝又　隆（KATSUMATA　TAKASHI）
福岡教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：60587640

研究成果の概要（和文）：古代日本語の文終止には、終止形だけでなく、連体形も頻繁に述部に現れる。本研究では、上代の終助詞ガネ文と「連体形＋ソ」文の比較、上代から中世にかけての「連体形＋ソ（ゾ）」文と疑問表現との関わりに関する考察、上代と中古のモノゾ文の記述を行った。その結果、文終止体系の変遷を記述する上で、複合辞の成立過程や疑問表現との関わりを視野に入れる必要があることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In ancient Japanese sentence end, not only the end-form but also the adnominal form emerges in the predicate frequently. In this study, I considered it from the viewpoint of following three. (1) The comparison between “gane” structure and adnominal form-“so” structure in the Nara period. (2) A relation with adnominal form-“so(zo)” structure and question expressions from Nara period to the Middle Ages. (3) The comparison of the use of the “monozo” structure in Nara period and Heian period. As a result, it became clear that two following points of view were necessary to describe the change of the adnominal form predicate sentences. ① The relations of the establishment process of compound words and adnominal form predicate sentences. ② The relations of question expressions and adnominal form predicate sentences.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２０１０年度 | 910,000 | 273,000 | 1183,000 |
| ２０１１年度 | 540,000 | 162,000 | 702,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 1450,000 | 435,000 | 1885,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：日本語学
キーワード：国語学・日本語史・文法史・係り結び・連体形述語文

## １．研究開始当初の背景

日本語史において、近代語から現代語へと移り変わる際に起きた大きな変化としてしばしば指摘されるのが、終止形と連体形の同形化と、格助詞による格関係の明示化である。

その要因としては従来、曲調表現であった連体形終止文（いわゆる「連体形止め」）が次第に新鮮味を失い一般化していったとする説（主として日本語学の概説書に見られる記述）や、連体形そのものに注目し形態音韻論的観点から「示差性」をその要因とした坪井美樹『日本語活用体系の変遷』（2001年、笠

間書院）等、個別の現象と結びつけるものが多い。

また、文法面における古代語から近代語への変化を、「係結的断続関係」から「論理的格関係」への変化と見なし、係り結び構文の衰退を中心に考える立場もある（森重敏『日本文法通論』（1959 年、風間書房）、尾上圭介『文法と意味Ⅰ』（2001 年、くろしお出版）等）。

後者は、社会情勢の変化（武家政権の誕生）から、気心の知れない未知の相手との交渉の必要が生じ、係り結び構文のような感覚的表現を避け、論理的格関係を明示するという変化の方向を決定づけたとする、外的要因の考察を導いた。

これらの先行研究には重要な示唆を含むものも少なくない。しかし、古代語の終止形が消え、形態面で連体形に合一するという現象は、言い換えれば文終止において起きた現象である。その意味を考える際には、古代日本語の文終止体系がどのようなものであり、それがどう変化したのかという視点が必要である。

そもそも、連体形を述語に持つ構文は係り結び構文と連体形終止文だけではない。

連体形接続の終助詞（ソ（ゾ）等、係助詞の文末用法とされるものも含む）構文もそうであるし、連体形接続のナリ（以下、連体ナリ）は上代には見られず、中古以降確例が現れる。連体ナリは、係助詞の結びや連体節（名詞修飾）には現れないことも知られており、文終止体系の変化を考える際に重要な構文である。

また、形式名詞に断定辞（古代語ではソ（ゾ）やナリ、現代語ではダ／デアル／デス等）が下接した構文も形式上は名詞述語文とも見なせるが、文法機能の拡大が見られ、文法化が生じたと見なせるものも一定数観察される。さらに、「形式名詞＋ナリ」形式は従属節にもなりうるが、「形式名詞＋ソ（ゾ）」は原則的に文終止に限られる。

こういった様々な論点を持つのが連体形述語文であり、これを係り結び構文や連体形終止文も含めた体系として包括的に扱うのが本研究の立場である。

このような背景のもと、報告者が本研究期間以前に取り組んだ研究内容は以下の通りである。

まず、確言系の連体形述語文である「―ソ―連体形」文（いわゆる係助詞ソ（ゾ）による係り結び構文）を中心に、その機能と変遷を描くことを試みた。「―ソ―連体形」文と「連体形＋ソ」文の相補的な関係とその史的変化における連動、および「―コソ―已然形」文と「―ソ―連体形」文とが接近していく過程、そして「モノソ（ゾ）」文と「モノナリ」文の差異および上代から中古にかけて「モノソ（ゾ）」文の文法化が進行する様子を「―ソ―連体形」文や「連体形＋ソ」文とも比較しながら記述することに取り組んだ。

本研究は、こうした研究を受け継ぎ、発展させていくことを意図して取り組んだものである。

## ２．研究の目的

本研究の目的は、古代日本語における用言の連体形が述部を構成する構文（以下、連体形述語文）の文終止体系における位置づけを明らかにし、その史的変遷を記述・考察することである。

## ３．研究の方法

(1)　上代から中古にかけての「モノソ（ゾ）」文の変化が何を意味するのか、文終止体系においてどう位置づけられるのかを明らかにする。

(2)　上代語の連体形接続の終助詞ガネの文法機能を明らかにした上で、文終止体系における位置づけについて考察する。

(3)　終助詞ゾによる連体形述語文が疑問詞疑問文にも現れることから、疑問詞疑問文や係助詞ヤ・カ、終助詞ヤ・カによる「疑問表現」と比較することで、連体形述語文について考察する上での課題を明らかにする。

## ４．研究成果

(1)　2010年度の成果

2010年度は、３.研究の方法(1)の一部と(2)および(3)を実施した。

①　論文「「ム」が上接する「モノソ（ゾ）」文について」（田島毓堂編『日本語学最前線』（和泉書院）、2010年5月）では、モノソ（ゾ）で終止する文と、モノナリで終止する文とを比較した。〈表１〉からわかるように、ムモノソ（ゾ）・ベキモノナリという形式は見られるが、ベキモノソ（ゾ）・ムモノナリという形　式は上代では見られず、中古においても稀であることがわかる。また、その原因を助詞ソ（ゾ）と助辞ナリとの機能面での差異から説明した。

〈表1〉上代モノソ・モノナリの上接語

| | モノソ | モノナリ |
|---|---|---|
| 動詞 | 10 | 27 |
| 形容詞 | 2 | 5 |
| ズ | 1 | 4 |
| ル | 0 | 1 |
| ツ | 1 | 0 |
| ヌ | 1 | 0 |
| リ | 0 | 4 |
| ケリ | 0 | 1 |
| ベシ | 0 | 11 |

| | | |
|---|---|---|
| ム | 10 | 0 |
| 合計 | 25 | 53 |

② 口頭発表「上代における助辞「ム」の機能と連体形述語文との関わりについて」(第232回筑紫日本語研究会、2010年8月、九州地区国立大学九重共同研修所）では、連体形述語文における助辞ムの現れ方を整理し、疑問表現における「問い」と「疑い」の差異から考察する必要性を主張した。

これは、上代における「連体形＋ソ」文は疑問表現に用いられないが、中古以降の「連体形＋ゾ」文は疑問詞疑問文として「連体形＋カ」文よりも頻出するという事実から生じた論点である（なお、助詞ヤは疑問詞疑問文には現れず、中世以降衰退していく）。

上代の助詞カは「疑い」（対人性無し）と「問い」（対人性あり。いわゆる「質問」）の両方に現れるが、「疑い」の文脈にやや偏ることが知られている。先行研究によれば、原則的に係り結び構文における「カ―ム」の呼応は「疑い」の用法となるが、上代にすでにこの関係が頻出し、中古に入るとさらにその傾向は強まるという。

本発表では、上代の「連体形＋ソ」文がムと共起する（「―ムソ」となる）一方、中古の「連体形＋ゾ」文がムと共起しなくなるという事実から、ムと共起しなくなったことが疑問詞疑問文として用いられるようになった原因の一つであると考えた。

「連体形＋カ」文も中古にムと共起しなくなっているが、疑問詞疑問文にはあまり現れず、真偽疑問文へと特化して行く。また、疑問詞疑問文におけるカは「疑問詞＋カ―ム」という係り結び構文において「疑い」の用法を担っている。そして、上代の「―ソ―連体形」文が疑問詞疑問文を作る際にはムと共起しない。

これらの事実を踏まえ、助詞ソ（ゾ）がカと比べ、相対的に「問い」の文脈に現れやすかったものと想定した。

③ 論文「上代における終助詞「ガネ」の機能と「連体形＋ソ」文」（『福岡教育大学国語科研究論集』52号、2011年2月）では、上代語の助詞ガネ(連体形接続)に注目し、ガネ文が「未実現事態に関して、前件と後件が因果関係で結ばれていることを明示する」という機能を持つことを示した。また、上代の「連体形＋ソ」文で助辞ムにソが下接する際にはガネ文と同様の機能を持つことを示し、ガネ文衰退の一因と位置づけた。

④ 口頭発表「連接関係から見た古代日本語の連体形述語文について―”確言系”の構文を中心に―」(名古屋言語研究会例会（第85回）、2010年12月、名古屋大学）では、中古のゾによる係り結び構文で結びが助辞ムの場合や「ムモノソ（ゾ）」文が、上代のガネ文と同様の機能を持つことを示した。

これにより、上代から中古にかけての連体形述語文の変遷が、ある一つの構文から別の一つの構文へと機能が移ったという個別の変化ではなく、複数の連体形述語文が相互に連動する体系的な変化として捉えるべきであるということが明らかとなった。

中古から中世にかけて疑問詞疑問文の中心が「連体形＋ゾ」文であることも踏まえた上で、連体形述語文の体系的変化は、“確言系”と“疑問系”の区別を発展的に取り払い、両者の史的連続性を体系的に記述すべきであることを主張した。これは②を踏まえた主張である。

(2)2011年度の成果

2011年度は、３．研究の方法の(1)を実施した。

① 論文「上代におけるモノソ文の用法」(『福岡教育大学紀要 第一分冊 文科編』第61号、2012年2月）において、上代のモノソ文（名詞モノに連体修飾節が上接し、モノにソ（ゾ）が下接して終止する文）の用法について記述した。用例を以下に挙げる。

1）石麻呂に我れ物申す夏痩せによしといふものそ（吉跡云物曽）鰻捕り食せ（万葉集16・3853・大伴家持）
2）…いにしへゆ言ひ継ぎくらし世間は数なきものそ（可受奈枳毛能曽）慰むることもあらむと里人の…（万葉集17・3973・大伴池主）
3）…そこ故に心なぐやと高円の山にも野にもうち行きて遊び歩けど花のみにほひてあれば見るごとにまして偲はゆいかにして忘れむものそ（忘物曽）恋といふものを（万葉集8・1629・大伴家持）
4）かくばかり恋ひむものそと（将戀物其跡）知らませばその夜はゆたにあらましものを（万葉集12・2867）
5）…いそしく仕へまつらむ人は、その仕へまつれらむさまのまにまに品々讃め賜ひ上げ賜ひ治め賜はむものそと（治将賜物曽止）詔りたまふ天皇が大命を…（第一詔　文武元年　文武天皇）
6）万代に照るべき月も雲隠り苦しきものぞ（苦物叙）逢はむと思へど（万葉集10・二〇二五　柿本朝臣人麻呂歌集）
7）復た勅りたまはく神たちをば三宝より離けて触れぬものそとなも（不触 物曽止奈毛）人の思ひてある。（第三十八詔　天平神護元年十一月庚辰　称徳天皇）

上代のモノソ文は〈代用〉〈一般的傾向〉〈解説〉〈必然〉〈当為〉〈詠嘆〉といった用法を持つが、いずれも名詞述語文の構造を基礎として文脈等によって実現する語用論的用法であり、いわゆる「助動詞」とは異なることを示した。

② 口頭発表「中古モノゾ文による推量用法」（第237回筑紫日本語研究会、2011年8月、九州地区国立大学九重共同研修所）および口頭発表「中古におけるモノゾ文の用法」（名古屋言語研究会（第96回）、2011年12月、名古屋大学）において、上代と中古のモノゾ（ソ）文について記述・考察を試みた。前者の質疑応答で得られた問題点に基づいて追加調査と再考察を行ったものが後者である。

中古のモノゾ文は〈代用〉〈一般的傾向〉〈必然〉〈当為〉〈詠嘆〉〈推量〉等、さまざまな用法を持つ。そして、連体形に助詞ソ・ゾが下接して終止する構文（以下「連体形＋ゾ」文）は、上代においてはいわゆる推量の助辞ムがゾに下接して「―ムゾ」という形式が現れるが、中古には現れなくなる。上代には見られない、モノゾ文の推量用法（文末形式は常にムモノゾ）が、上代の「―ムゾ」文と類似の表現内容、推論方式を担い、構文的特徴も禁止表現や命令表現、意志表現の根拠として用いられる等、多くの点で共通していることを主張した。

以下に、中古のモノゾ文の用例を挙げる。

8）「妻を思へば、いたくかたびく」と笑ひ給ふ。心のうちには、衣どもぞ萎えためる、恥づかしと思はんものぞと思ほしけれど、「はやその人呼び出（で）て寝よ」との給へば、（落窪物語・巻之一）

9）又姫君の御料なる一領、「ちひさき人に著せ奉り給へ。旅にはあらはなる事も有るものぞ」とて奉り給ふ。北の方、喜ぶ事、さすが限りなし。（落窪物語）

10）「…そのほどを尋ねてし給ふぞかし。それこそ心深けれ。蝶はとらふれば、手にきりつきて、いとむつかしきものぞかし。又蝶はとらふれば、わらは病せさすなり。あなゆゝしともゆゝし」と言ふに、いとゞにくさまさりて言ひあへり。（堤中納言物語）

11）「かむの君に、さま変はりたまへらむ装束など、まだ栽ちなれぬほどはとぶらふべきを、袈裟などはいかに縫ふものぞ。それせさせ給へ。…」（源氏物語・若菜下）

12）御厨子所の御膳棚といふものに、沓おきて、はらへいひののしるを、いとほしがりて、「誰が沓にかあらん、え知らず」と主殿司人々のいひけるを、「やや方弘がきたなきものぞや」とりに来てもいとさわがし。（枕草子）

13）「凶は、一夜ばかりと思ふまじきものぞ。まして、この井は五六日もありぬべかんなり。…」（狭衣物語）

14）世継がいふ様、「よはいかにけうあるものぞや。さりともおきなこそ…」（大鏡）

15）「思ひ疎みたまはば、いと心うくこそあるべけれ。よその人は、かうほれぼれしうはあらぬものぞよ。限りなく底ひ知らぬ心ざしなれば、人の咎むべきさまにはよもあらじ。…」（源氏物語・胡蝶）

16）乗り添ひたるをだに思ふに、なぞかくいや目なると、にくくおこにも思ふ。老たる者は、すずろに涙もろにあるものぞと、おろそかにうち思ふなりけり。（源氏物語・東屋）

17）忍びかねたる御夢語りにつけても、思ひあはせらるること多かるを、うらなくも思ひけるかな契りしを松より波はこえじものぞと（源氏物語・明石）

18）関入る日しも、この殿、石山に御願果しに詣でたまひけり。京より、かの紀伊守などいひし子ども、迎へに来たる人びと、「この殿かく詣でたまふべし」と告げければ、「道のほど騒がしかりなむものぞ」とて、まだ暁より急ぎけるを、女車多く、所狭うゆるぎ来るに、日たけぬ。（源氏物語・関屋）

19）二条院の対の御方には、聞きたまふに、「さればよ。いかでかは、数ならぬありさまなめれば、かならず人笑へに憂きこと出で来むものぞ、とは思ふ思ふ過ごしつる世ぞかし。…」と思すにも、（源氏物語・宿木）

20）殿は、東の御方にもさしのぞきたまひて、「中将の、今日の司の手結ひのついでに、男ども引き連れてものすべきさまに言ひしを、さる心したまへ。まだ明きほどに来なむものぞ。あやしく、ここにはわざとならず忍ぶることをも、この親王たちの聞きつけて、訪らひものしたまへば、おのづからことことしくなむあるを、用意したまへ」など聞こえたまふ。（源氏物語・螢）

21）「御あへづらへ仕うまつり侍らんと思ひ侍りつるを、とみの事とて、人まうで来たればなん。聞えさせつる事の残もまだいと多かり。えんにをかしうて侍りし、まめやかに聞えさせ侍らん。うへには、かくおり侍りぬとな聞えさせ給ひそ。おどろきさいなまんものぞ。さりぬべくはまうのぼらむ」とておりぬ。（落窪物語）

22）ようあひ言ふなるにぞありける。さりければ、「そこにて問はむものぞ。け

さ出でたまひつるを見てけり。もし聞きて問はば、かう答へよ」とて、言ひたる。（平中物語）

23）かぐや姫泣く泣く言ふ、「さきざきも申さむと思ひしかども、かならず心惑ひし給はんものぞと思ひて、いまゝで過し侍りつるなり。さのみやはとて、うち出で侍りぬるぞ。おのが身はこの国の人にもあらず。月の都の人なり。…」（竹取物語）

24）「この宮はしも、このわたりにかならずたづね寄り給はんものぞ。一目も見たてまつり、わりなき御文も一度通ひぬる人、…」（濱松中納言物語）

③　論文「モノゾ文による推量表現の成立」（『日本語文法史研究』（ひつじ書房）第１号、2012年9月刊行予定）において、①と②を踏まえた追加調査と考察を行った。

中古の〈推量〉のモノゾ文は確信度の高い推量表現に用いられ、その推量判断はいずれの場合も事態における因果関係の「結果」に対するものであり、本論文で検討した構文的特徴からは、ムモノゾが蓋然性の高さを示す複合辞として働いていると見なせることを指摘した。

成立過程としてはモノゾ文のＰハＱモノゾ型の構文的意味〈一般的傾向〉に支えられて成立しており、中古の共時態としても、その働きをモノゾ文という構文の存在が保証しているものと考察した。

また、モノゾ文が中古に推量用法を獲得した背景として、以下の二点を指摘した。

ａ　上代においてすでにモノナリ文との間に用法の棲み分けが生じ、助辞ムが上接しやすい環境にあった。

ｂ　上代の「連体形＋ゾ」文がムゾの形で推量用法を持ち、中古のムモノゾと類似の推論方式と構文的特徴を持っていた。

さらに、本論文では、推量表現以外のモノゾ文の多くが提題のハと共起するのに対し、推量用法のモノゾ文には提題のハが原則として現れないという点も指摘した（〈表２〉）。

〈表２〉モノゾ文の用法と提題のハ

| | 上代 | | 中古 | |
|---|---|---|---|---|
| | モノゾ | ハ | モノゾ | ハ |
| 代用 | 2 | 2 | 1 | 0 |
| 解説 | 7 | 1 | 0 | 0 |
| 一般 | 8 | 6 | 13 | 9 |
| 適当 | 3 | 0 | 0 | 0 |
| 当然 | 3 | 0 | 1 | 1 |
| 当為 | 1 | 0 | 1 | 1 |
| 詠嘆 | 1 | 0 | 3 | 3 |
| 小計 | 25 | 9 | 19 | 14 |
| 推量 | 0 | 0 | 17 | 0 |
| 合計 | 25 | 9 | 36 | 14 |

※「一般」は〈一般的傾向〉。
ハは提題のハのみ。

これは川端善明(1994)「係結の形式」(『国語学』176号）に言う「助詞の呼応」の一つ「ハ―ゾ」が推量用法の際には観察されなくなるということでもある。

本論文で示した他の構文的特徴も踏まえると、中古のモノゾ文の推量用法は、ムモノゾ形式が複合辞として文法的意味を担っていると見なせる。このことは、名詞述語文の歴史や複合辞研究の観点からも興味深い現象であるが、連体形述語文の研究においても重要な意味を持つ。モノゾ文の推量用法は未然形接続の複合辞ムモノゾによるものだと解釈した場合、上代の「連体形＋ゾ」文の一部の用法が連体形述語文ではない構文に受け継がれたことになるからである。

このことが連体形述語文の変容によるのか、ムの変容によるのかという新たな論点を見出せたことも、2011年度の成果である。

(3)今後の課題

2010 年度は連体形述語文の体系的な変化を捉える上で、疑問表現との関わりを視野に入れる必要があることを主張した。

2011 年度はモノソ(ゾ)文を中心に考察し、複合辞ムモノゾ成立の経緯を記述した。

疑問表現の変遷に関しては、先行研究の成果によるところが多く、今後連体形述語文との関わりという観点からの考察を深めていく必要がある。

複合辞ムモノゾの成立によって、モノソ文の一部の用法が連体形述語文とは異なるのではないかという新たな問題が生じた。これは研究開始時には想定していなかった課題である。

「推量」や「当為」の用法を持つという点では助辞ベシやムズなども考察の対象となりうる。ベシも推量用法の際にはアリ系述語や状態性述語に下接する場合に偏ることが知られており、複合辞的な面を持つ。ムズはムトスという形式に由来すると考えられており、これも複合辞である。これらは元々連体形述語文ではないが、モノソ（ゾ）文とは類似している。連体形述語文の変遷は連体形述語文だけを見ていては捉えきれないということであり、関連する言語事象を幅広く観察していく必要がある。

本研究全体でしばしば問題となったのが、上代と中古の助辞ムの問題である。連体形述

語文にはムとの共起が問題となることが多いが、上代と中古で差異が認められる場合、それが連体形述語文の変化によるものか、ムの変容によるものか、あるいはその両方によるものかを明確にすることができなかった。ム以外の論点を整理することで、ムの影響も次第にわかってくるという点では本研究の意義はあったと考えられるが、今後はムそのものに関する考察も行っていく必要がある。

すでに述べたベシやムズ等との関わりも含め、より広い視野からの考察を長期にわたって行っていく予定である。

また、中古に成立する連体ナリとの関連については未考察であるため、これについても今後扱っていく。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 勝又隆、モノゾ文による推量表現の成立、日本語文法史研究、査読無、第１号、2012年、９月刊行予定のためページ数未定（掲載確定）
② 勝又隆、上代におけるモノソ文の用法、福岡教育大学紀要 第一分冊 文科編、査読無、第６１号、2012年、pp.35-46
③ 勝又隆、上代における終助詞「ガネ」の機能と「連体形＋ソ」文、福岡教育大学国語科研究論集、査読無、５２号、2011年、pp.73-83
④ 勝又隆、「ム」が上接する「モノソ（ゾ）」文について、日本語学最前線（田島毓堂編、和泉書院）、査読有、2010年、pp.345-359

〔学会発表〕（計４件）

① 勝又隆、中古におけるモノゾ文の用法、名古屋言語研究会例会（第９６回）、2011年12月17日、名古屋大学
② 勝又隆、中古モノゾ文による推量表現、第２３７回筑紫日本語研究会、2011年8月8日、九州地区国立大学九重共同研修所
③ 勝又隆、連接関係から見た古代日本語の連体形述語文について―“確言系”の構文を中心に―、名古屋言語研究会例会（第８５回）、2010年12月18日、名古屋大学
④ 勝又隆、上代における助辞「ム」の機能と連体形述語文との関わりについて、第２３２回筑紫日本語研究会、2010年8月10日、九州地区国立大学九重共同研修所

６．研究組織
(1)研究代表者

勝又　隆（KATSUMATA　TAKASHI）
福岡教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：60587640